



## 面白いことを追求したら、 シティガイドに行きついた 嶋田 昌子さん

3日住めば浜っこ、と言われる中、3代前から横浜市本牧在住。こよなく横浜を愛し、横浜のガイドならお任せ、の嶋田さんですが、その活動のきっかけは意外なところにありました。

### PTAから家庭文庫

もともと私は女子大の助手として、万葉集の研究をしていました。研究の傍ら取り組んだのは、女子大職員のための保育園をつくる運動です。これは、将来子どもを持った時に、学内に保育園があれば仕事しやすいと思ったからですが、残念ながら私の在籍中は間に合いませんでした。しかし、運動は退職後の翌年に実を結び、現在保育園のある女子大になっています。

助手はしていたけれど、研究にはあまり向いてなくて、妊娠をきっかけに家庭に入りました。当時は育児か仕事か二者選択の時代でした。10年間専業主婦をしていたのですが、その間子育てに明け暮れ、何とかもう一度社会に出るきっかけはないか、とっていました。

子育てをしている頃、専業主婦が社会と接点を持つ機会はPTAのみという時代でした。私には子どもが3人おりますので、結構長くPTA活動をしました。それでももっと社会的に外に出たい、という思いは強く持っていました。

当時、横浜市は人口急増にインフラが追いつかず、いろんな施設が不足していました。特に図書館が横浜市内に2つしかなかったのには、心の底から驚きました。まだ中心地が米軍に接收されていて、税金が少なく、お金がなかったからです。私は結婚したばかりのころ少しだけ東京23区に住んだ事がありますが、横浜に戻ってきたときに、東京と比較するとあまりにも文化施設が少ないのに愕然としました。優先順位が高い学校でさえプレハブ、それ以外の文化施設は後回しになっている時代でした。

「子どもに本を読ませたいけど、図書館がない。」というのは大きな課題でした。じゃあ、どうしようかと考えた時に、横浜市が「家庭文庫\*をつくれば、本は貸します。」という仕組みをつくったので、それにのって地域の有志と、本牧で家庭文庫「カンガルー文庫」をつくりました。カンガルー文庫では読書会も盛んにやりましたが、その時のメンバーの想いは、「横浜に文化がないなら、自分たちでつくろう。」という

意気込みだったと思います。

＊地域の母親などがグループをつくって地域の自宅や空き部屋を利用してつくった、自主的なミニ図書館。

## 家庭文庫からトベラ学級へ

カンガルー文庫で活動をしながら、地域のことに徐々に目が向いてきて、もっと地域のことを知りたいという思いは強くなっていきました。その時に「生涯学級という制度があり、少し補助金が出るらしい」ということを知り、「家庭文庫の次は生涯学級だ」、とこれも有志を募ってスタートさせました。

もともと本牧は海だったのですが、「トベラ」という暖地の海岸に自生する植物の名前をとって、「昔を忘れない」という思いを込めて、生涯学級の名前は「トベラ学級」にしました。そこで本牧の歴史を学んだのですが、万葉集を読むような文献による学習ではなく、生きた本牧の歴史を学ぼうと考えました。そこで、元漁師さんや海苔問屋さんなど、海に関係する仕事をしている方がいらっしゃいましたから、そうした方たちから話を聞く講座を開催して、その内容を「海があったころの本牧」という冊子にまとめました。

その後、私が社会教育指導員になることになり、そうなるトベラ学級を運営するわけにはいかなくなりました。そこで、皆でお別れ遠足をして、トベラ学級は解散しました。一応、活動にひと区切りをつけた、ということです。

## 洋館探偵団

社会教育指導員として仕事をはじめたのですが、続けるうちに物足りなくなりました。というのも、社会教育指導員の責務は、生涯学習を立ち上げるお手伝いをしたり、その面倒をみるというお世話係です。それはそれで貴重な仕事なのですが、私は人の面倒をみるよりも自分で活動した方が面白い、というタイプなので、合わなかったのだと思います。

本牧のことを学ぶと、必然的に本牧には多数あった洋館を知ることになります。「洋館は面白い。どこにどれぐらいあるのか、歩いて調べてみよう。」という有志が集まり、徐々に山手まで足を延ばすようになり、1982年に洋館を巡ってマップ作りを行う「ヨコハマ洋館探偵団」をつくりました。

洋館探偵団のマップ作成が講座開催に進みました。講座を開催すると人がたくさん集まってきます。今でも洋館探偵団の講座は続いていて、今年24年目に入りますが、毎回100人程度の参加者があります。これは、横浜の洋館の魅力があるからだと思います。



＜トベラ＞



＜シティガイド協会発行の本および取材記事＞

## 横浜シティガイド協会

「洋館探偵団」の、年間に5、6回開催している「洋館探偵団」の連続講座へは約100人の参加がありますが、もっと大勢の人たちに横浜の魅力を語る方法はないものか、と考えるにつくったのが、「特定非営利活動法人横浜シティガイド協会（以下、シティガイド）」です。

「シティガイド」とは、街の知識とそれを伝えるスキルを身に付けたガイドが、横浜の魅力をご案内するものです。「シティガイド」に案内してもらいたい人は、「シティガイド」が定期的に募集するコースにご参加いただくか、人数がまとまれば直接お申込みいただきガイドを派遣する、というように、多様なパターンでご案内をしています。現在、毎年1万人以上の人たちに、横浜の魅力を知っていただくガイドを行っています。

ガイドは現在100人以上在籍していますが、2年に1回くらい養成講座を行っていて、1回に20人以上が新ガイドとして誕生しています。ガイドになるには、まず養成講座を受講していただき、講座を修了すると入会の資格を得られます。それですがガイドとして活躍できるのではなく、その後1年間グループでテーマを決め、横浜のマップ作りを行います。この間に平らな人間関係を学んでもらいます。そうしてはじめて、ガイドとして人前でご案内できるようになります。

## シティガイドは観光ボランティアにあらず

「シティガイド」は観光ボランティアではありません。横浜市民は、外から移ってきた人、横浜のことをよく知らない人が多いのですが、それではまちづくりができません。

だから、できるだけ横浜市民には横浜のことを知っていただきたいと思い、そうしたコースをいくつか用意しています。

たとえば、横浜にはかなり農地があり、農家もたくさんあります。そうした横浜の農業を実感できるコースや、自然を楽しめるコースなど、横浜の今を知ってもらえるコース作りに取り組んでいます。

そうして横浜のことを理解すると、どういう横浜にしたいか、こういう町に住みたいというビジョンを描くことが出来ます。そんな横浜市民がたくさん生まれてくれば、と思っています。



＜シティガイド協会 ガイドの様子：  
中華街の春節＞



＜シティガイド協会 ガイドの様子：  
横浜3塔巡り＞

横浜は150年の歴史しかありませんが、開港以来、いろいろなものが詰め込まれてきたので、非常に面白い街です。たとえば、関内には神社、お寺が一つもありません。

本来、あの規模の集落には、必ず神社やお寺があるものですが、ありません。それは、開港場の歴史ならではのことで、そうした歴史を一つ一つ学ぶと、そこからまた学ぶものがあります。

## ガイドに向く人

「シティガイド」も10年が経過し、かなり高齢化していますが、皆さん元気です。それは①かなりの距離を歩くので、健康的 ②調べなければならぬので、頭を使う ③気配りが大切なので、ハートを使う の3原則がその秘訣のようです。神奈川新聞に街の魅力の連載をほとんどのガイドが書きました。連載が一段落したら、本として出版するというような晴れの日もあり、多くの人に活躍の場を提供していることも、元気が継続するコツかもしれません。

今、「シティガイド」は男性と女性が半々ですが、私は女性にこそガイドになってもらいたいと思っています。調べ物をして、人前で話す、というと男性の活躍の場、と考える人も多いのですが、女性は人に気を遣ったりすることに慣れているので、ガイドに向いています。

とはいえ、ボランティアは好きなことから始めるのが一番です。私も好きなことを追求していったら、「シティガイド」に行きついたらと思っています。

ですから、自分が楽しいと思うことから始めてみてください。



＜シティガイド協会 ガイドの様子（左：みなとみらい地域の夜景、右：小学校の修学旅行）＞

**編集後記** 嶋田さんは、本当にバイタリティーに溢れている方だなという印象でした。お話を伺っていると、「社会的に外に出たい」から始まり、次々と活動を発展させていかれた様子が目に見えるようでした。家庭から社会活動、そして男女共同参画まで本当に真剣に向き合っているのだと心から感じました。

### ◆団体概要

**特定非営利活動法人横浜シティガイド協会** <http://www.ycga.com/>

「横浜をもっと好きになってもらいたい」と他国や他都市から訪れた人だけでなく、市内在住の人にも市民の視点からガイドを展開している。